

千花とお稲荷様の絵の具

亀美市立朝日中学校 三年 田丸 真記子

きらきらと木漏れ日が差す道を歩く。やがて赤い鳥居が見えてきた。そして、その向こうに古い神社が忘れられたようにある。千花は階段を駆け上がり、道をゆっくりと歩く祖母に向かって叫んだ。

「お婆ちゃん、早く行こつ。」

「あらあら、待ちなさいな。神社は逃げないからね。」

千花は稲荷神社の賽銭箱に、ポケットから取り出した小銭を入れる。そして古ぼけた木製の長椅子に座る。ゆっくりとやって来た祖母が座ると、さらにキシギシと音をたてた。

「お婆ちゃん、お昼ご飯食べよ。」

千花が手に持っていた布包みを開く。黒色の弁当箱を開けようとしたとき、千花の手に水滴が落ちてきた。

「あれ?」

汗かと思つたが、また数滴落ちてくる。千花は慌てて空を見上げるが、朝の天気予報どおりに青空がずっと広がっている。真新しいパレットに青色一色の絵の具を広げたみたいに単調だ。

「お婆ちゃん、雨降ってきちゃった。」

「ああ、これはねえ、天気雨っていうんだよ。」

「ふうん。でも、雨が降ったら困るね。折角お婆ちゃんが稲荷鮎

を作ってくれたのに。」

「大丈夫、すぐに止むからねえ。それにしても何だったかしら? 天気雨のもう一つの呼び方があったのにねえ。」

祖母はそう言つと、ゆっくりと目を閉じる。千花も真似てやつてみる。雨が落ちる音がするのだが、かえってそれが静けさを増し、神社はひっそり閑としている。

どのくらい経つただろうか。千花がふと目を開けたとき、何か素早く千花の足下を横切つた。

「犬、かな?」

がさがさと草むらが動く。千花は風呂敷に包まれた弁当を持ち、ゆっくりと立ち上がった。祖母はすっかり眠っていて何も気付いていない。

「あ!」

千花が少し視線をそらした隙に、金色の毛並みの何かが神社の向こうに走りだす。

「うら、待ちなさい!」

千花は金の塊を追いかけて、神社の後ろに回る。そこには小さな道があつた。

「こんな道、あつたかな?」

千花はあの金のすばしっこい塊を探した。あれだけ素早いのだ。もしかしたら振り切られてしまったのかもしれない。千花があきらめかけたとき、また草むらからあの金の塊が飛び出してきた。「狐だ! そつか、お稲荷様なんだ。」

千花が狐に近付くと、狐はくるりと向きを変えて走りだす。

「待つてよー少しぐらい触らせてよ。」

千花はまた狐を追いかける。狐も速いが千花だって負けてはいない。

追いかけるのに夢中になっていると、千花はいつのまにか広い道を走っていた。赤い鳥居がいくつも連なっている。

「どこ？どこ？」

後ろを振りかえると、同じように赤い鳥居が連なっていた。

「ねえ、お稲荷様 私帰りたいの！」

走って熱い頬に、冷たい雨の滴が落ちる。

「ねえ！」

狐はいつの間にかいなくなっていて、そこには千花だけが忘れられたように立っている。千花は来た道をまた走り出す。だが、どんなに走っても走っても鳥居の終わりも、古ぼけた神社にも辿り着かない。

「もっ。お稲荷様の意地悪。」

千花はその場にへたり込む。千花の息切れの音だけが響く。風が吹いているのに木の葉の擦れる音すら聞こえてこない。やがて息が整うと、耳が痛くなるような静寂の世界が千花を襲う。千花はゆっくりと立ち上がり、服に付いた汚れを払う。やがてまた、静寂の世界が訪れる。

静かな世界に、一つの音が響いた。

チリン。

鈴の鳴る様な音。千花は自分がやってきた方向から、何かがやってくることに気付いた。

チリン。

その音はだんだんと大きくなってくる。千花は、やってきた何かの姿を見て息を飲んだ。それは集団だった。お面を着けて、神輿を担いでいる。中には男も女も子供もたくさんいた。その中でも一層目立つのが白い布を目深に被る女性と隣の男性だった。息を凝らして千花はそれを見詰めている。と、

突然その列の中から小さな男の子が小走りでやってきた。やはり他の人たちと同じように変わったお面を着けている。そして男の子は千花に向かって手の平を突き出した。一緒に来いということだろうか。

「何？」

千花が男の子の意図が分からずにおどしている、男の子が催促するよつに、手をさらに突き出す。

「えっと。あ、はい。」

どうしていいのかわからず、千花は小さな手の上に風呂敷に包まれた弁当を置いた。

「稲荷鯨、お婆ちゃんが作ったの。おいしいよ。」

男の子はしばらくそれを見詰めたが、両手でそれを抱えて列の方に走る。そして、列に戻る前に千花を振り返った。

「どつしたの？」

男の子が小さな指であらぬ方角を示す。

「あ。」

そこには狭くて小さな道があった。先程までこんな道があったらうか。千花が視線を戻すと、そこには男の子の姿はなかった。ただ、お面を着けた老若男女、様々な人が神輿を担ぎ、それを囲んでいる。

「あ、有難う！」

過ぎていく列の中から、男の子が振り返って手を振った。千花は列が見えなくなるまで、手を振りながら見送った。

狭い道を抜けると、古ぼけた神社の裏に出た。千花は木製のベンチで座る祖母の隣に座った。

「あら、千花ちゃんお帰り。どうしたの、そのお面。」

「お面？あれ？」

千花は今更ながら、自分の右手にあるお面の存在に気付く。あの男の子の物だ。間違いない。

「それに、お弁当はどうしたの？」

「あ、お稲荷様にあげちゃった。本当よ、お稲荷様と会ったの。

綺麗な花嫁さんもいたのよ。」

「そつそつ、思い出したのよ。」

祖母はにつこりと微笑みながら、千花に言った。

「天気雨のこと、狐の嫁入りって言つのよ。」

千花は空を見上げた。太陽の光がきらきらと光ってまぶしい。心なしか、ここに來たときに比べて空が綺麗になつた気がする。

「空が綺麗ねえ。」

「うん。もしかしたら、お稲荷様が絵の具で塗り重ねちゃったのかも。」

二人の見上げる空は、青にお稲荷様の雨の色を足したような、きらきらと光る不思議な色をしていた。